

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

地域に根差した女性と子供のための病院

①⑩ アルテミス ウイメンズ ホスピタル (東京都東久留米市)



米国の図書館や大学を思わせるレンガの外観

「子供たちがあふれ、女性が笑顔で暮らせる希望の町にしたい」。そんな理想を掲げ、今年2月に開院したアルテミス ウイメンズ ホスピタル。病院名はギリシャ神話の女神アルテミスにちなんで命名した。アルテミスは「女性と子供」の守護神で、「戦いの女神」でもある。ギリシャ系ロシア人の女医で、同ホスピタルを運営する医療法人社団レニア会の武谷ピノピ理事長が言う「医療従事者は病氣と戦う第一級の戦士」との理念にもかなう名称だ。

武谷理事長は1950年、東京・清瀬市に武谷診療所を開設。同診療所はその後、武谷病院、

きよせの森総合病院と名称変更しながら、北多摩地区の地域医療に尽力してきた。同ホスピタルの前身は同病院の産婦人科で、60年に開設されて以来、順天堂大学の関連病院として地域の産婦人科医療の一端を担ってきた。年間出産数は約1400件を誇り、豊かな経験と技術を身に付けた医師たちが診療に当たってきた。

同ホスピタルでは産婦人科と小児科に加え、女性ならではの症状の診断・治療を行うため、女性内科を開設。妊娠から出産、退院後の母子の健康管理までを診る体制を整えた。



武谷典子副理事長



明るく広々とした産科待合。ハイレゾ音源のBGMが流れる



富士山が見える眺望の良い南向きの特別室ブルメリア



ホテルを思わせるモダンな配色の産科病棟



4階のカフェテリア。明るく見晴らしの良い空間で、くつろいで食事ができる



屋上や各階のテラスは緑化されている

地上4階建てで、免震構造。機能性だけでなく、患者や家族が快適に過ごせるよう、インテリアデザインにも力を入れている。赤れんがの外観は重厚感を感じさせ、ロビーにも上品な家具が並ぶ。産科と婦人科では来院動機が異なる点に配慮し、待合は分けた。小児科の診察室は明るい色合いで、動物をモチーフにしたデザインが取り入れられている。各階には物語性のあるアートが掲げられ、CDより高音質なハイレゾリューションのBGMが流れている。

プライバシーを重視し、病床数60床のうち52床

を個室にしたり、家族が泊まれるようにソファベッドも設置したりしている。陣痛・分娩・回復が一部屋で行えるLDR室も6室設けた。

また、4階のカフェテリアは減塩・脱化学調味料にこだわったおいしい食事を提供していることもあり、妊産婦たちのコミュニケーションの場となっている。「このような場づくりが、退院後の交流につながっている」と同ホスピタルの武谷典子副理事長は語る。

同ホスピタルは地域の産科ニーズに応えることで、地域の活性化に貢献しているのだ。

受ける人、働く者を包む「柔らかさ」

⑪① キャップスファミリークリニック北葛西 (東京都江戸川区)



キャップスとしては二つ目にできたクリニック。子供から大人まで生涯を通じてのかかりつけ医を目指すため、小児科に加え、内科・アレルギー科を標榜

『きれいですね』と多くのご家族に言っていた
だいています。お子さんは来院すると、走
って行って好きな本をまず取る。読みながら待つこ
とが多いようです。すぐに呼んでしまったときには、
『あまり読めなくてごめんね』と、こちらが謝ることも
あるくらいです(笑)』

澤井潤院長はそう言うと、相好を崩した。開院
から1年2カ月が経過した。澤井氏は昨年12月
に着任。半年ほどをここで過ごしたことになる。
365日、夜8時(小児科は9時)まで診療を行う。
「一人ではできない。僕たちが目指す医療も一

人でやることを前提にはしていません。多くの医師
でやっていくことで気が付けることもある。医療者
の疲労にも配慮できる仕組みもつくりたいと考えて
います。医療を受ける方、働いている者の両方に
優しい環境にしたい」(澤井氏)

一人で医療を続けると、徐々に外の情報が入り
づらくなっていく。一人でも勉強している医療者はも
ちろんいるだろうが、新しいものに目が届きにくくな
ってくる。グループ内の4クリニックでは情報の共有
を心掛ける。はやっている病気の情報をいち早く
手に入れたり、「こんな患者さんがみえて困った」



待合。壁には多くの絵本や児童書。代官山のクリニック同様、選書は代官山葛屋書店のコンシェルジュが担当

中待合。患者の健康状態を配慮し、照明は間接照明に近いものを用いている



特別待合室。ワクチンを接種する患者の感染対策にも気を配っている



タブレットを使う問診システムはキャップスグループの全クリニックに共通



小児科診察室。壁の絵で子供たちの関心を引き、医療機関特有の「怖さ」を緩和



処置室。熱性けいれんなどの患者が来てでも対応できるよう、設備は動線を考えて整えてある

というときもすぐにメールしたりする。「相談しやすい環境」が整っている。

予防医療には力を注いでいる。中でも、予防接種への取り組みは特筆できるものだ。

「お母さん方はワクチンに高い関心を持っておられる。公費で打てないものでも、情報を伝えると、『打たせたい』『私は打たなくていいんですか』といった反応が返ってきます」(同前)

ワクチンばかりではない。「病気の情報」に患者の家族は非常に敏感。だが、「病気の情報を知るコンテンツ」は世の中にそれほどない。

「一方、本当に正しいのかどうか分からない中途半端な情報はいっぱいある。インターネット上や一部のメディアで目にするようなものです。その割に医療機関から伝えられる情報は極めて限られている。保護者の方向けの冊子を作ったのを手始めに、今後もいろいろやっていきたい」(同前)

医療を通して患者に最大限の幸福を提供する——キャップスのミッションだ。澤井氏はこうした理念に共鳴し、「ここで働く」と即決した。

「理念はぶらさず、ハードやソフトは時代に合わせて変えていく柔軟性を持ってほしい」(同前)